

これからのろう教育に ろう教育研究部が貢献できること

ー これまでの研究とこれからの取り組みについてー

武居 渡
(ろう教育研究部)

これまでろう教育研究部が 取り組んできたこと

WISC-IVを聞こえない子どもに実施する場合のマニュアル作成

○背景

- 聞こえないことに加えて発達障害を併せ持つ子どもの増加
- 様々な認知特性を持つ聞こえない子どもに合った指導の必要性
- 正規のマニュアル通りに実施した場合の問題点
 - 何を回答していかかわからず得点できない。
 - 日本語を知らないだけなのに知的障害が疑われる。

- ろう学校で聞こえない子どもに発達検査「WISC-IV」を実施する場合の留意事項や教示方法についてまとめたマニュアルを作成。
- 教示に使用する手話表現については動画にまとめる。

これまでろう教育研究部が 取り組んできたこと

○ろう学校や教育現場への還元

- 再度チェックしたうえで今年度中には、マニュアルと教示の手話表現の入ったPPTファイルを全国のろう学校に送付する。
- 聞こえない子どもを指導している難聴学級や発達支援センター等にも希望があれば送付する。

※ ただし、WISC-IVは、公認心理士等、資格を持った人しか実施できないため、希望者すべてに配布することはせず、有資格者がいる機関や教育機関に限って送付する。

これからろう教育研究部が 取り組んでいきたいこと

ろう学校高等部で活用できる手話指導プログラムの開発

○背景

- 聞こえない子どもたちの3分の2は普通学校で学ぶ。
- 通常学級にいる聞こえない子どもは、音声言語環境の中で育つ。手話入力は皆無。
- 難聴学級の多くは1人学級で他の聞こえない子どもとの接点は少ない。
 - 手話に接する機会は限定される。
- ろう学校においても、高等部などインテの子どもの割合が多くなると音声メインのコミュニケーションになってしまう現状。

若い世代の手話使用者の減少

手話消滅！？

考えさせられた本
ドン・クリック「最後の言葉の村へー消滅危機言語タヤップを話す人々との30年ー」

○パプアニューギニアの村人200人が使う言語タヤップ

- 30年にわたり、その記述と記録を試みる。
- 若い村人はタヤップを学ばない。
- 言語の消滅は内側から起こる。
- タヤップ話者50人が亡くなったら、タヤップは消滅する。



「言語が消滅するとき実際に消滅するのは、すっかり破壊された文化の最後に残ったかけらである。その文化をなぎ倒して破壊した力は、残った50人ほどのタヤップ語の話者が制御できるものではない。だから、村人が自分たちの言語を放棄していると我々が嘆くのは無神経で傲慢だと私には思えるのだ」

ろう学校高等部の現状

今まで

- インテの生徒が高等部に入ってきてても、生え抜きの生徒の割合が多かったので、何とか手話を覚えて卒業する。

現在の状況

- インテの生徒の割合が増えると音声が共通のコミュニケーションになってしまう。生え抜きの生徒が肩身の狭い思いをする。
- ろう学校をもっとも必要とする生徒がろう学校にいつらい環境になりつつある。

ろう学校で手話を教える必要性

- 高等部の授業の中で、意図的に手話を教えていかなければならない時代になったのでは。
- ニュージーランドの例
- 第二言語として手話を学ぶ子どもたちがいてもよいのでは？

○ ろう学校が子どもたち同士学びあえる場であるためには「共通のコミュニケーション」という視点が欠かせない。

○ 学校設定科目として「手話」を置くことは可能か。

ろう教育研究部でできること

- 高等部生徒の手話力の実際
- すでに刊行されている手話評価法を活用
- 本当に高等部生徒の手話力は落ちているのか。
- 2つのニーズに応えられるカリキュラム開発



幼稚部からろう学校で学ぶ生徒
→ 授業を通して自分が使っている手話の言語的特徴（文法）を理解



高等部からろう学校に転入した生徒
→ すでに獲得している日本語をもとに第二言語としての手話を学習

考えられる手話カリキュラム

- 手話文法を基にしたカリキュラム作成

※ 手話ができる生徒

→ 自分たちの言語である手話の言語性を理解し、誇りを持つための授業

※ 手話が十分に使えない生徒

→ 文法を説明されることで手話の骨格を理解できる。肉付けは日ごろの会話を通して。

手話通訳養成とは異なる
手話カリキュラムが必要では？